

▽総会 第一会議室

▽シンポジウム

場 所 早稲田大学文学部第一会議室

テ ー マ 交錯する日米の日本研究

総合司会

西洋史学専修 竹本 友子氏

趣旨説明

東洋史学専修 李 成市氏

報 告

戦後における日米の近代史研究

国際教育センター 岡本 公一氏

異文化へのまなざし―E. S. モースの見た日本―

考古学専修 菊池 徹夫氏

コメント

北海学園大学 犬飼 裕一氏

東洋史学専修 近藤 一成氏

討 論

▽懇親会 高田牧舎

〈日本史部会〉

名主「関口家」の生活と地域

―「日記」記述が指向するもの―

木 下 はるか

近世の地域社会については、「家」や村などの社会環境のあり方やその強制力が指摘されている。だが、個々人が家・村・共同体や当時の諸環境の中でどのように日々の生活を切り開いていたのかという具体層は、まだ十分には明らかにされていない。そこで村方に残る「日記」とその関連文書を中心史料とし、近世農村における人々の生活の一端を明らかにしたい。本報告では武蔵国橋樹郡生麦村（現在の神奈川県横浜市鶴見区）の豪農関口家に残る「関口日記」を一事例として、「日記」の記述形式や記述者の変化に留意しながら、二代目当主藤右衛門を中心に関口家の相続、財産管理のあり方を明らかにする。「関口日記」を残した関口家は宝暦年間に分家した家であり、二代目の当主以降は名主もつとめるなど、地域における指導者層の家であった。

まず日記の記述形式については、初期の日記には雇用記録や日々の金銭の出納が細かく記載されていた。だが徐々に家の経営や村政に関わるまとまった金銭出納の記録が日記部分と分けて記載されるようになり、「日記」の形態も整ってくる。次に日記の記述者につ

いては主に三つのことが指摘できる。1) 日記の中心記述者は当主であり、家政経営や役務の引継ぎとともに時期当主に記述が受け継がれること。2) 藤右衛門の場合は死の直前まで日記記述に参加しており、家督移譲後も日記記述者がその時の当主に限定されていないこと。3) 藤右衛門の母親など他の家族員によっても日記の記述が補完されていることである。特に三つ目の母親については、当主不在時の臨時的記述だけではなく、自ら関わった金銭出納のメモを当主とは別に書き込んでいる箇所もあった。このように、「関口日記」は女性も含めた家族員によって記述が補完され、実際の「家」経営に活用されていたといえる。

ではそこにおける家族のあり方とはどのようなものだったのか。日記に記載された家族員の行動から関口家の相続、財産管理のあり方をみってみる。

相続に関しては、家政と名主としての職務の引継ぎとがある。関口家においては長男が幼い頃から年頭の挨拶廻りを行っており、藤右衛門の息子東作の場合、文政六(一八二三)年一月には二十歳で名主見習に就任して徐々に役務に参加し、文政八(一八二五)年からは江戸方面の年礼も任されるようになっていく。このように、関口家では長男相続が指向され、周到な名主家存続への配慮がなされていることが分かる。

だが関口家の資産に関しては当主に一本化されていたわけではない。

日記からは、藤右衛門が隠居するまでも息子の東作が、隠居してから隠居所が独自の管理財産を持っていることが分かるが、藤右衛門の母りゑ、妻いゑが財産管理者として記述されることもある。りゑ、いゑの財布から夫がお金を引き出す場合は、「借用」「預り」という形を取っており、夫の財布と混合しないよう配慮しているが、関口家の貸付金に使われるなど関口家の財産運用においても一定の役割を果たしていた。先行研究ではりゑの晩年の金融活動(村人への小口貸付など)も指摘されている。このように関口家では次期当主、女性、隠居者が独自の管理財産を持っており、かつ同じ「日記」の中に把握されていることが分かる。

以上の分析により、関口家では当主から当主へという「家」の存続が強く意識される一方で、隠居者や女性が財産管理主体として、関口家の経営と家族員の生活を支える独自の立場を持っていたのではないかと考えることができる。つまり、「家」を一つの経営体と考えた場合、次期当主、女性、隠居者が独自の管理財産をもつことで、「家」内部の家産管理主体を複数化する(すなわち「保険」をかけたおく)という経験的な知恵が働いていたと推測できるのではないだろうか。今後は隠居者や女性の財産管理をさらに詳しく検討していくとともに、関口家全体の資産運営の中で、家族員それぞれの財産管理がどのように位置づけられるのかを明らかにしていきたい。(なお、関口家の財産管理については、発表後に史料を改め直したので関口家の家政管理状況を詳述する形の論構成に訂正した。)